

令和8年度島根県立大学人間文化学部

3年次編入学試験 一般選抜

保育教育学科 小論文問題

【問題】

以下の文章は、「子どもの引きこもり」を抱える家族に対する筆者のカウンセリングについて論じたものである。筆者は、家族の関係を見る視点を心理学から政治学に転換することで、引きこもりの子どもがいる家族は、変化の可能性、起動点が見えてくると述べる。筆者のこの見解を踏まえながら、教育者を目指す立場から家族関係の見方に関するあなたの考えを、ふさわしい題をつけて800字以内で論ぜよ。

8050問題として、このところ話題になることの多い引きこもりを例にとろう。長年引きこもっている人たちはネット上であれ、家族であれ、あらゆるコミュニケーションから自らを閉じて撤退している。

家族の多くは「なんとか引き出そう」「なんとか動かそう」とするが、それらの企てやかかわりはことごとく失敗する。この点は不登校とよく似ている。親が登校させようとすればするほど学校に行けなくなる、というプロセスと相似形なのだ。

カウンセリングにやってくる親は、万策尽き果てている。精神科医や著名な宗教家などを歴訪した末に訪れてくるのだ。私たちは、まず焦点を、引きこもりを変化させることから両親のチームワークの形成へとシフトする。なぜなら、長年の彼らの引きこもりによって両親の夫婦関係は破綻しているからだ。

子どもに問題が起きたとき、両親がそろってお互いを支えあい、問題に直面していこうという姿勢を示す例は少ない。そのような夫婦関係であれば、問題は発生しなかったのかもしれない。ただ、そう言い切ることは単純な因果関係に帰着させる危険性があるので、断言は避けなければならないが、破綻した夫婦関係があまりに多いのだ。

父は母の子育て姿勢を責め、母はそんな父を恨む。経済的支柱であることが子どもへの無関心の免罪符になっている父親は実に多い。そして、夫に非難された母親は自分の力で子どもをなんとかしようと頑張り続け、引きこもっている彼らと母親との奇妙な密着が生まれる。引きこもっている人が母を攻撃することが多いのは、距離の近さの裏返しである。

バラバラになり、お互いを不信の目で見つめる両親が、それぞれ別のエネルギーで、引きこもっている息子(娘)を引き出そうとするのだ。当事者にしてみれば、こんな恐ろしい、こんな悲劇的なことはない。

したがって、家族の対応は、まず両親がチームを組むところから始まる。実は、これが一番の難題なのだ。引きこもり本人への対応のほうがたやすいことすらある。夫の無関心によってあきらめきっている妻は、そんな夫と協力などできないと思う。しかし、「子どものために」という水戸黄門の印籠のような言葉を最終兵器にすれば、不可能ではない。その前提として、方針を提示する私たちカウンセラーへの信頼が不可欠であることはいうまでもない。

100%は無理だとしても、48%くらいの協力なら可能かもしれないというのが、私の正直な臨床実感である。こうしてぎくしゃくして転びそうな二人三脚が始まる。

私たちが試みようとしているのは、家族の関係を土台からつくりかえることだ。「息子の引きこもり」が表現しているのは、これまでの家族関係の限界、いわば臨界点である。一つの問題が生じたことによって、その家族は大きな構造改革を迫られているのだ。

少なくとも、私たちはそのような認識に基づいてカウンセリングを行っている。

これがベストであるという保証はない。それ以外にも、様々な理論や考え方があることは十分承知している。たとえば、三歳児神話に基づいた、幼児期に愛着関係が形成されていないことが基本にあるのだから、とにかく「受け入れましょう」という説。本人は病態水準が悪いから、なんとしてでも専門医に受診させなければなりません、とって強制的に病院に連れていく方法。数年前、引きこもりの男性を拉致して監禁し、薬を飲ませていた施設が摘発されたが、どれほど多くの親が引きこもりの息子に頭を悩ませていたかが世間に認知されるきっかけになった。

私たちは、そのどれとも異なる立場をとっている。基本は当事者を無理やり動かそうとしない点にある。かといって「受け入れる」という、何の具体性もなく親の勝手な思い込みでいかようにも解釈される主観にも立脚しない。愛情で包むという、これまたどのようにも利用される危険な言葉は、そのリスクゆえに用いない。

構造改革とは、コミュニケーションを通じて家族の関係を変化させることを意味する。家族の関係とは、父と母の夫婦関係、父子、母子の親子関係から成る。この「関係」はしばしば愛情やはぐくみ、思いやり、やさしさ、温かさとともに語られてきたが、私たちはそれらを一切消去する。代わって登場させるのが、支配、力、被害、加害、戦略、駆け引き、作戦、といった言葉である。

いわば、心理学から政治学へのパラダイム転換である。家族はこのようにして政治的(ポリティカル)に解釈されることで、変革の可能性、起動点が見えてくると思う。

出典：信田さよ子『家族と国家は共謀する—サバイバルからレジスタンスへ』
KADOKAWA、2021年(一部改変)